

釣りに釣られて

高原英夫

第二十五回 「馬淵川（その三）」 横浜のオジさん

小学生の私にとって夏休みは特に待ち遠しいものだった。高学年になるとなおさらで、朝は誰からも起こされることもなく眠りをむさぼり、昼メシを食うとナリコと呼ばれた青いリングを持ち、塩をつけかぶりつきながら馬淵川へ泳ぎにでかけた。夕方まで川で遊んで家に帰る。ただただ自由で楽しく、縛りつけるものは何もない日々だった。宿題は三日でやつつけ、残りの図画は夏休み最後に描けばいいだけだった。

しかも、私にはさらに待ち望んでいたことがあった。母には弟がいた。つまりオジさんだ。名を昭四郎さんといった。他にもオジさんはいたのだが、昭四郎さんだけは毎年のように横浜からやつてくるのだった。

四人いたオジさんたちは雄躍田子町の家を引き払い、川崎、横浜でそれぞれに事業を起こし成功していた。

昭四郎さんが来る日を母から告げられると、もう心はバネでも仕掛けられたよう

に飛び跳ねていた。暦の日にちを太く大きい丸で囲み、その日をひたすら待った。

家の前にクラウンが着いた。オジさんだ。一人の時もあれば、いとこの兄弟二人を連れて来たり、時にトランクから狩猟犬のポインターが出てくることもあって、来る度ごとに、さらに嬉しいことが付録のように必ず付いていた。奥さんの実家のある福島県へ寄つて、奥さんを降ろしてから来るのだった。

昭四郎さんは若かった。まだ三十代の半ばだった。どこか長嶋茂雄に似た風貌で目許が優しく、話しかけられると、もうふんわりと雲に乗ったように温かく柔らかい雰囲気にも包まれたものだった。そして都会の匂いがした。

その日の夜は、父と母とあれこれと子供からすれば小難しい話が続ぎ、私はすぐに寝てしまうのだった。

次の日からだ。私と弟に、

「さあ、行くぞ、乗れ」

と言うと、クラウンで川遊びに向かうのである。まずは生まれた土地の田子町から、また少し奥へ行った熊原川のほとり、そして、その川の下流、三戸町の入り口あた

りの堰堤下の大きな溜り。弟と私はただ岸にいて見ているのだ。大きな水中メガネにシュノーケルと足ビレをつけ、ふつと息を継いでは潜りを繰り返すのを見ているだけで、もう満足感いっぱいだった。右手にヤスを持ち潜るのだが、その先に魚が付いていたのを見たことはない。しかしそのことは何の問題でもなかった。

そしてまた夕食になる。昭四郎さんは酒に酔い、何の歌かわからないが森繁久彌をマネて気持ちよさそうに歌っていた。

そして必ず一日は、あの同級生の女の子の家の下にあるあの場所へ行くのである。そこはタキと呼ばれていた。だから「タキの下へ行く」という。漢字の滝だとは思いうのだが今でもわからないままだ。そこへ弟と二人で案内するのである。

まばゆいばかりのクラウンに乗って少しばかり山道を走り、同級生の女の子の家の畑の横に車を置く。そしてむせるような夏草の匂いの中の小径を一気に馬淵川まで下る。さすがに、その日はトンネルは通らない。

あの夢の中のような景色が今日も広がっている。早速、オジさんは潜る支度を始める。私たちもただその辺りをパシャパシャと泳ぎまわるだけなのだが、うれしさ

に急かされるようにシャツやズボンを脱ぎ捨てて川に飛び込む。

オジさんは、

「鱒はいないかなあ」

と言つてはあちこちの深場を探っているのだが、「いた」という声はしなかった。結局これといった漁はなかった。それでも一日、子供ばかりではなく、立派な大人と遊び戯れるこの場こそ、他の誰にも教えたくない場所だった。

しかし四、五日すると、横浜へ帰る日が必ずやつてきた。明日がその日だとなると、もう私の心は寂しくて寂しくてどうしようもなくなっていた。

何かオジさんから話しかけられても、素直な返事も返せずにいる。ただ車に乗り、あの川、この川と思いつき走り回るだけのことなのだが、オジさんが来る前からの期待がそのまま実現しているだけに、別れがその分以上に辛く思えるのだった。

前日には帰り支度で、シャツをたたみ、土産を用意し、すでに心は横浜にいるオジさんを、何かスネた気持ちで近づきませず、離れもせすの距離で見ていることしかできなかつた。

そんな何度目かの時、私は別れの前日から風邪を引いてしまった。そんなに強く罹ったということでもないのだが、全身の力が抜けてしまっていた。私は二階の部屋にこもり、親にもその気持ちを伝えられず、シクシクと泣いていた。父はアンプルの風邪薬を買って来るとその首根に切込みをチリツと入れ、ポクツと折って私にストローで飲ませた。甘辛い、別れの日そのままの味がした。

いよいよ別れの朝、私は寝ていた蒲団を一階の居間のテレビの前に敷いた。そして父にもう一本アンプルを飲ませてもらった。午前の九時頃には発つのだった。高速道路などない時代の話だ。ひたすら国道四号線を走り続けなければならない。早い時間に発つのは当然だった。

私はオジさんが車に荷物を積むのを寝ながら見ていた。本当は風邪などはどうでもよく、来たときのように、あれもこれもと、話したいことが頭の中に溢れているのだが、寂しさが勝り私の体を蒲団に押しつけていた。もう半ベソ状態なのだが、それはそれで風邪のせいにもできる。格好悪くしたいという気持ちと混じり合って、一言も発せられないでいた。

「ヒデオ、じゃいくぞ、また来るからな」

と私の額に熱を計る仕草をして、大丈夫だという風に軽くポンとたたくと、表に出て行った。父と母と弟の見送りの声がして、エンジンをふかす音がして、オジさんは帰って行った。

そして時は流れ、実家には弟が残り、二人の甥と一人の姪が生まれた。もうあのオジさんの思い出から二十年余りの時が過ぎていた。

私は盆とか正月にたった一日なのだが、妻と二人の娘を連れて、青森から実家へと向かった。子供たちは虫取りをしたり、すぐに慣れて遊んでいた。

そして帰る日のこと、甥たちは必ずといって見送りに出てこない。車にいつぱいの土産を積み込んでいると、二階の窓の隅にマサル君がチラッと見えた。

「マサル！、みんなもう行くつてよ。下に来て、さよならしなさい」

弟は二階に向かつて大声で言っている。しかし、マサル君からは何の声もないまま、私は別れの言葉を言い出発する。

ああ、あの時の私が、そして私の心がそこにいる。そして私もあの昭四郎オジさんになったのかと思えたりもするのだった。

しかし、そうした思いからも、もうすでに二十年近く経った。

母は平成十八年に八十七歳で亡くなり、昭四郎さんも後を追うようにその三年後に亡くなった。八十歳だった。時は知らず知らずのうちに確実に過ぎていった。

平成23年11月